

平成 21 年 5 月 19 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520268

研究課題名（和文）詩と造形芸術、2つのポイエーシスの対話

研究課題名（英文）Poetry and Art : dialogue between two poiesis

研究代表者

丸川 誠司（MARUKAWA, Seiji）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・准教授

研究者番号：70339612

研究成果の概要：

初年度、米仏の研究者を招聘し近代ヨーロッパでの詩と造形芸術の関わりを巡るシンポジウムを開催、日本の研究者との緊密な意見交換がなされた。発表は(1)ボードレーンと18世紀の関係、(2)マネの絵画を読み解くバタイユとフォーコー、(3)ブルトンの手書き文字の問題、(4)デュパンとボンヌフォワのデッサン論の考察、(5)ボードレーンからヴァレリーやアルトーに至る系譜のまとめと再考察、(6)詩人デュパンとの質疑応答、に分かれ、各発表者が近代から現代を対象に、詩人と画家の、ひいては「見る」と「言う」の間の親和力または緊張関係の確認を行った。次年度は研究代表者が、研究対象のデュパンの絵画論の草稿研究、及びボンヌフォワの言及するフレスコ画の実地検証などを行い、次の論文の準備を進めた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：フランス文学、美術・美術史、哲学

1. 研究開始当初の背景

ヨーロッパ近代の伝統では特にフランスのボードレーン以降、造形芸術に触発され、その記述を試みる詩のエクリチュールの実践が始まる、とされてきた。ボードレーンにおいて、詩と絵画の新たな絆、あるいは「見

る」と「言う」の相関関係の見直しが始まったといつてよい。こうして生じた詩人と画家の間の緊密な関係 ボードレーンとドラクロワ、あるいはマラルメとマネなどの関係が、20世紀初頭のアポリネールとキュビスト

の画家、さらにはブルトンとシュルレアリスムの画家などに受け継がれることになる。そしてこの後の戦後世代の詩人、ボンヌフォワ、デュパンなどの数々の美術論も、時には実際の大芸術家との親交に基づいて生み出されたものであり、これらは、時として美術史家、批評家などの言説にも影響を与えていく。かつてのホラチウスの「詩は絵のごとく」という譬えが、ヨーロッパにおいては明らかに近・現代フランスで最もよく具現したことになる。日本においては、シュルレアリスム関係の研究をのぞくと、優れた詩人のみ持ちうるこの視線を、その系譜をたどり直しながら問題にする試みはあまりなされていなかった。精神分析や分析哲学などの成果も取り入れ複雑化した最近の美術史の観点も考慮しながら、本研究を進めることにした。

2. 研究の目的

近代の詩人と画家を結びつける関係性について、近年の、イメージないしはアイコンをめぐる言説（現代の文脈においてその功罪を様々な角度から分析する内容）の動向をふまえながら、たどり直す必要があった。なぜボードレーン以降、詩人が、芸術家の特権的な対話者となりえたか、言い換えれば、なぜ詩人の直観がしばしば、明確に言語化されていない芸術家の意図を嗅ぎつけ、繊細かつ的確に表現しえた最初の実在であったかを、近年哲学的文脈で問題になるイメージを巡る論議の中で再度問いかけることが目的だった。また、研究代表者の守備範囲を越えた領域にも目を向けるべく、シンポジウムを開催し、有名詩人、欧米及び日本の研究者を交えた論議を進め、知的な刺激を得て、可能なら友好的な関係を樹立することを希望していた。

3. 研究の方法

初年度、次年度を通じて、関連する詩や美学、哲学関連の著作の探索と精読、メモとり

の作業が行われた。これらのメモから重要な問題系を洗い出し、考察と検討を進める、という過程が繰り返された。必要図書を購入、図書館の海外文献コピーサービスの利用などがあった。

次年度は、特別研究期間を取得してパリに滞在したことより、仏語文献の探索、アクセスがより簡単だった。重要な点は、詩人のデュパン氏に直接いろいろ質問できたことである。とりわけ詩人、作家、哲学者などの草稿を管理しているジャック・ドゥーセ図書館の使用許可を得て、同図書館に通い、デュパン氏の未発表の草稿を転写（コピーは禁じられているため）した。次に教務でイタリアに滞在したこともあり、ボンヌフォワがエッセイを記した G. ベリーニとビザンチン絵画、あるいはピエロ・デラ・フランチェスカのフレスコ画など数々の重要な作品に実地に接することができた。またジョヴァンニ・ベリーニやピエロ・デラ・フランチェスカに関する重要な古い美術雑誌の論文（英語とフランス語）は、Fondazione Querini, Biblioteca Marciana などに通って読むか、ないしコピーを依頼した。

4. 研究成果

最も重要な成果は、初年度に開催された、米仏の研究者を招聘して開催されたシンポジウムであり、発表、ないし臨席した日本の研究者との緊密な意見交換がなされたことである。

まずは、ルネ・ジラルドに師事し、既にボードレーン論をフランスで出版したレジナルド・マクギニス氏が、ボードレーンがアイデアを得た 18 世紀の秘教的思想に重点を置きながら、「言葉の錬金術、色の錬金術」という観点から発表を行った。

そして哲学、文学の関連分野で十数冊を出版している J.-M. レイ氏が初来日し、ボードレーン、ユイスマンス、ヴァレリー、アルト

一等の芸術論を、ときに哲学的な観点（ウィトゲンシュタイン等）から考察する講演を行った。例えば絵画と詩が、感覚美の色、あるいは対象を同一視させる線などを共通の懸念とし、互いに呼びかけ合いながら互いの再定義を試みるとするならば、それは、文学、絵画がそれぞれ自分自身で従属せず、常にもう片方から求められているかのようなことが強調され、シンポジウムの全体をまとめるにふさわしい内容であった。

また、健康上の理由で来日は断念せざるを得なかった詩人のジャック・デュパン氏は、詩と海外に関する自らの考え、そしてミロ、ジャコメティをはじめとする画家との協力関係（とりわけ詩に版画ないしグアッシュを添えた豪華本の作成過程など）に関して、研究代表者の質問に答えてくれた。

日本人の側からは、まず吉田裕氏が、ボードレールとマラルメの友人でもあったマネが、20世紀のバタイユとフーコーという二人の思想家の目にどのように写ったかを通じて、これら思想家の考えの共鳴部分と相違を分析。マネが詩人と思想家の両方にとって重要であったとするならば、それはマネがこの時点で近代芸術の運命を具現した存在であり得たことを、二人の思想家の思想の文脈に沿って検討した。

シュルレアリスム専門家である鈴木雅雄氏は、テキストとイメージの相関関係という観点から、特殊なケースであると言えるブルトンの『大鳥かご』と題された作品を取り上げ、その手書き文字の持つ特殊な時間性と、書き手の「私」の同一性の関わりについて綿密な検証を行った。

研究代表者（丸川誠司）は、デッサン（素描）と詩の関係を、まずはその系譜（忠誠の聖書の挿絵の次元から近代の印刷術によるページの空間の統一化まで）、言葉とデッサンが、詩人と画家の関係でもあるようなこと、また現代的な文脈で、言葉もデッサン

ももはや沈黙＝空白を切り開く作用を担われているかのようなことを強調した。

このように、開催されたシンポジウムでは、詩（文学）と絵画の関係を、重要な詩人、思想家の著作の綿密な検討を通じ、(1)思想的な背景と意味の考察、(2)実際のテキスト上での協力関係の考察、という二つの方向性で進められた。結論として詩（文学）と造形芸術はお互いを經由して、それぞれの歴史、それぞれの記憶を問題にすることになり、それぞれが根本的に別の芸術を必要としていること、つまりどの芸術もそれ自体で充足しておらず、エクリチュールと絵画のそれぞれがお互いの手段を借りようとするのを、様々な（しかも重要な）例と、様々な角度から確認した。またこのモチーフの根源は、ボードレールにおいて最もはっきり表れており、この意味からボードレールの（美術評論を含めた）批評の重要性が再認識されたが、同時に、仮にこの問題系がボードレール以降の近・現代に至って急速に浮上してきたとするならば、それは言うなれば、詩、絵画がそれぞれ、自分が何であるかを再び探求せざるを得なくなったから、という根本的な問題が秘められていることの確認があった。この自らの既存の表現形式に対する疑念が、詩人と画家の結びつきを一層強化した。これらの発表全ては、フランスの近代から現代にかけての重要な動きを一望させる内容のものであり、日本で海外の重要詩人および研究者を交えて開かれた、このような形でのシンポジウムは先例がないし、フランスでも数は決して多くない。今後日本の関連分野の研究者にも大きな刺激を与えるものと予想される。

次年度は研究代表者が、研究対象とする詩人デュパンの絵画論の草稿研究、及びボンヌフォワの言及するフレスコ画（ピエロ・デラ・フランチェスカ等）の現地検証などを行い、次の論文の準備を進めることができた。ジャック・ドゥーセ図書館に預けられたデュ

パンのジャコメティ、ミロを巡るノート、あるいは画家との協力で出版されたオリジナルの詩集の検証を含む草稿研究を通じ、この詩人がどのような形で、絵画に関する濃密な言説を構想したか、そのプロセスの一端が伺い知れた。ちょうどこの詩人の美術論を集めた大きな本も出版され、研究代表者はこの草稿研究を役立てながら次の論文を準備する予定である。

「詩は絵画のごとく」という言葉を好んで引用し、詩と絵画の相互関係の系譜について自ら語ることも多いボンヌフォワについては、その数多い著作からとりあえずイタリアの1400年代の重要な画家を巡る論考の研究を進めた。現時点での仮説は、ボンヌフォワが二つの時代あるいは二つの場所の境にある芸術家の作品にとりわけ重要な意味を見いだしていること（ちょうど彼の詩学が「ここ」と「あそこ」の戯れを軸に構成されているように）で、この点から彼の美術論の再考を試みている。その意味で、15世紀の画家、ピエロ・デラ・フランチェスカの重要性が再浮上した。これはフィリップ・ジャコテなど他の詩人にとっても重要な画家であり、その理由の検証が必要だった。既に20世紀初めに美術史家のR. ロンギと詩人のG. ウンガレッチィによるピエロの再評価が彼らの視線に先立つものとなる。この考察において、遠近法がいかにルネサンス絵画の時期は科学と芸術の、あるいは幾何学と想像世界の境界にあったかを強調し、しかもそれが「見る」と「言う」の橋渡しの役を担っている、とするユベール・ダミッシュのテーゼが重要な手がかりとなった。遠近法が統一したビジョンを保証する装置であるとしても、ボンヌフォワがピエロについて言うのはその側面ではなく、ピエロはむしろ彼の一種の夢想の中で重要な役割を占めている（あたかもこの夢想がある観点からの統一されたビジョンのいわばネガとして登場するかのよう）。彼の「夢

の話」等の中で登場するピエロはどのような役割を担っているのかのさらなる検討が必要である。この意味から、概して詩人の絵画論において、いわゆるフロイト理論で言う「形象可能性」の果たしうる役割の検討も、J.-F. リオタール、H. ダミッシュ、L. マラン、D. アラスなどの論文を比較しながら進められた。ただボンヌフォワについては近年夥しい数の論文が書かれており、これに目を通しながらの作業でもあった。またピエロについては、トスカーナを実際に訪れ、移動することのないピエロのフレスコ画の数々を実際に目にしたが、その旅程がまさにボンヌフォワの絵画論を読む上で重要な、「絵画と場所」という問題系を考察するための手がかりを与えてくれた。ピエロについてはこの他、最近の『謎の戦略』におけるピエロの「鞭打ち」に関する仮説はどういう意味を持つのかなどの具体的な検証がさらに必要となる。

ピエロ以外のボンヌフォワが扱った画家のジョヴァンニ・ベリーニなどについては、当時の西欧にとって「東」の象徴であったビザンチン絵画が「西」の扉として機能したヴェニスなどの代表的画家ベリーニにいかにか受容され、これをボンヌフォワが現代の文脈でいかに捉え直そうとしているか、あるいは詩人の直感と、事実との間の開きはどうかとらえるべきか、などの新たな課題が生じた。

ボンヌフォワ、デュパンは存命のヨーロッパの最大級の詩人であり、彼らの作品の中で重要な位置を占める美術論は、現代の画像文明において衰えつつある、絵画を見て感じ、考えることの意味を見直させてくれる内容のものである。美術史家の言説とも違う彼らのエクリチュールの特異性を問いかけるこの試みは、現代社会における文学、芸術の役割の今後の研究にとって重要な意味を持つと思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

丸川誠司、「素描、言説、疎通(デュパン、ボンヌフォワ)」、『学術研究』、査読無、43巻3号、2008年、p. 91-109.

〔その他〕

シンポジウム用に作成したHP

<http://www.f.waseda.jp/ms209/french.htm>

↓

6. 研究組織

(1)研究代表者

丸川 誠司 (MARUKAWA SEIJI)
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号：70339612

(2)研究協力者

(2007年9月のシンポジウム参加者)
レジナルド・マクギニス
Reginald McGinnis (アリゾナ大学准教授)

ジャン＝ミシェル・レイ Jean-Michel Rey
(パリ第八大学名誉教授)

ジャック・デュパン Jacques Dupin
(詩人)

吉田 裕 (YOSHIDA HIROSHI)
早稲田大学・法学学術院・教授
研究者番号：20120941

鈴木 雅雄 (SUZUKI MASAO)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：20251332